

「船遊び」と「仕切り根性」③

元おやさと研究所長
井上 昭夫 Akio Inoue

(前号よりつづき)

夢は湖上を駆け巡るが、以上のような試行錯誤を経て、究極の貧困漁村の自立支援という「谷底せり上げ」を目指し、ヴィクトリア湖に全長約20mでボディがブルーの「天理丸」を浮かべる「船遊び」の準備に入ることに落ち着いた。今回の訪問で、ふしぎにもエイズや紛争で孤児になった数多くの子供たちの世話取や教育活動を熱心に進めているヴィクトリア湖畔にある五十嵐仁・男能富分教会長が設立した天理ミッションセンターの一寒村において、伝統的船造りの技術を伝承するウガンダの船大工に出会い、意気投合し、懸案のアフリカ国際プロジェクトに思わぬ加速度がついたのである。

船首から船尾まで25mはある天理丸は2008年に遂に完成し、地域の名士や関係者を招いて進水式をおこなった。船首には、赤い座布団の上に『稿本天理教祖伝逸話篇』168の日英語による「船遊び」の頁を開けて船首に備えさせていただいた。『逸話篇』168には「教祖は、ある時、梶本ひさに向かって、『一度船遊びしてみたいなあ。わしが船遊びしたら、二年でも三年でも、帰られぬやろなあ。』と、仰せられた。海の外までも親神様の思召しの弘まる日を見抜き見通されてのお言葉と伝えられる。」とある。ようやくにして、わたくしにお言葉に応える決定的チャンスが与えられたのである。進水式の挨拶をしながら、五島列島北端に立って眺め上げた遣唐使船日本最後の寄港地にある「辞本涯」（空海の書から引用された日本の果てを去るを意味する）の碑が頭をよぎった。

天理丸は十数人の青年や孤児たちを乗せて、最初は周囲が100m四方ほどの狭いマクヨ島、次に貧困漁民の暮らす島全体があばら家トタンで覆われたように見えるウビン島にたどり着き、日本より持参の浄水器で湖水を手動で浄化して、ビニール袋を持って並ぶ婦女子たちに与えて喜ばれた。

この浄水装置は日本ベシック社長である勝浦雄一製作の自転車搭載緊急浄水装置「モバイルウォーター」を、手廻し型緊急浄水装置に改良したもので、自転車のペダルを漕ぐ代わりに手動ハンドルを廻すことにより取水・濾過できる日本ベシック社製のオリジナル浄水装置である。このすばらしい新製品は、私たちの仕事を理解してくれた勝浦社長の贈り物であった。浄水器は1日6時間も費やして谷間から水を毎日運び上げているムクワノ・エイズ孤児院の子供たちに贈呈し、村人たちから大変喜ばれた。汚水と濾過した水は、マケレレ大学の関係教授数名に科学的分析をしてもらい、その安全性を専門分野から検証してもらった。飲み水も航海する「舟遊び」の準備には、船の設計ともども必須の仕事だからである。帆船については大阪の造船場に通り、棟梁にその特徴を教示してもらっていたのである。

一方エンテベ港を出発した「天理丸」は孤島を巡回し、夕刻近くになって湖上で一時停止し、竹製の釣り竿で大人も子供もセラピアを一所懸命に釣り上げた。そのお初のセラピア1匹は、その日の夜に燻製してもらい、翌朝出発の飛行便でおぼぼまで持ち帰り、存命の教祖にアフリカにおける「船遊び」の証しとしてお供えをさせていただいた。

天理丸はその後船外機エンジンのご守護をいただき、孤児たちの本土での学校通学の往復や、貨物船、釣り船として3年間にわたり活用されていたが、船底板が劣化して残念ながら今は廃船となったと聞いている。再生を祈るや切なるものがある。一方、ウガンダの首都カンパラでは、南浦分教会の後継者である石原藤彦君が天理ウガンダミッションセンターに10年間夢見た天理武道館の普請に追い込みをかけている。完成すればアフリカ大陸初の日本武道館が誕生することになる。石原は空手教室を主として活動していたが、武道館建築には土嚢袋を基礎に活用している。一方、真誠ウガンダ布教所（淵和分教会）山崎敬久所長はウガンダ第二の都市マサカ市から30kmほど山奥の山頂に、土嚢袋のみで巨大な神殿を建築した。3代真柱様の親ごころの理の種をいただいて、天理「陽気丸」の再生と、天理武道館の竣工が一刻も早く実現することをこころから願い、御霊様への御礼とご報告に代えさせていただいた。

ところで、先日の講社祭で「みかぐらうた」の結論である12下り目を踊っているとき、各種の棟梁（伺い、荒木、小細工、建前、かな）は、『逸話篇』の「船遊び」に必要な棟梁の意味ではなかったかと直感された。「みかぐらうた」と『逸話篇』の「船遊び」篇は、海外伝道と世界たすけに直結していると悟って身震いしたのであった（アフリカ支援の関連問題にふれては「G8宗教者指導者サミットで取り組むべき課題」と題して詳しく筆者の講演録として掲載してある『東アフリカ貧困緩和自立支援活動報告書2009』天理大学発行（99～114頁）を参照のこと）。

最後に、この項を書き上げた先刻、豊田の墓地にご報告を兼ねて参拝させていただいた時のことである。初代真柱様の墓石に並んで立つ西側の空地の前にあった1本の松の太木が切り倒されてあった。複雑に入り込んで残された切り株の年輪を数えてみると115の年輪の模様なるものが数えられた。人間の寿命と教えられる数と同じ数である。切り株のまだみずみずしい薄褐色をした表面の形は、5本の指を持つふくよかな人間の掌にも見える。終戦直前、予科練生が空軍特攻隊の石油の代替物として松の幹に鋸で斜めに斜線を切り刻んで松脂をとった松の木は墓地に数本残っていたが、多分この木が「復元」の歴史を刻む眼に見える最後の松の木であったかと想像し、切断した理由を造園班の長谷川氏に確認したところ、松が枯れ始めたのでお出直しの10月23日に切断したとのことであった。折り返しわたくしは墓地に引きかえし、しばらく切り株を眺めていたところ突然切り株の掌のふくよかな2本の指が動いた感じがした。その方向は3代真柱様が、まさ奥様とおられる豊田山舎の「つきよみの命」の方角を指していた。「元の理」における男性原理を象徴する鯨の方角である。そこで、わたくしは真柱様がかつ「論達」第四号で力点を置かれた「仕切り知恵」「仕切り力」「仕切り根性」「仕切りの道」という「おさしづ」のお言葉を思い出しながら、山舎の前で深々と御礼を申し上げ、下山した。

墓地を歩きながら、お宅で若い住み込み青年と長年土俵の上で取られた真柱様の相撲の「遊び」体験が『みちのとも』追悼特集号に出ていたが、そのような「遊び」においても真柱様は全力投球であり、大相撲の「仕切り」の真剣勝負における知恵や、力士の仕切りにおける瞬発力の気迫の大切さを身体化されていたゆえに、ながい御身上においてもこの精神的「仕切り根性」が真柱様の「かりもの」の中がっちり二つ一つに一体化されていたのではないかと、遅まきながら深く考えさせられたのである。

教祖90年祭を期してひもろぎを、百年祭に際しては、しめなわと玉串廃止を決断し発表されたのも、天理教から神道色を払拭する「仕切り知恵」による「復元」にむけての「仕切り根性」であり「仕切りの道」であった。埋葬を避け、豊田山舎に納骨を望まれたのは、埋葬による墓地信仰からの一貫した「仕切りの道」を、教祖の教えに御生涯を通し素直にしたがって透徹された真柱様の遺言ではなかったかと思われた。

6月24日午後7時55分、お出直しの連絡を内統領室から受け取ったのは、午後9時前であったが、すぐにわたくしは朝日新聞本社の旧友の記者に、個人的な緊急情報として電話連絡をしたところ、翌日の朝刊割付校了直前に間に合ったのか、真柱様のご逝去のニュースが写真入りで、『朝日新聞』朝刊だけに掲載されていた。

なおその5年後の2018年（立教182年）には、「みかぐらうた」完結130年／「おふでさき」擲筆130年／『古事記』献進1300年記念出版として、日本地域社会研究所から出版された拙著『みかぐらうた』本が、天理警察特務課の強い要望により警察官のテキストとして進呈・受理されたことを追記しておきたい。天理教史がここに逆転したのである。それは3代真柱様の「仕切りの道」の成就であったとも思われる。

2代、3代真柱様は、表現しがたい激痛を伴う狭心症で出直された。わたくしも脳梗塞を伴う狭心症で出直すことに運命づけられている。感謝しなければ申し訳が立たない栄光ある同種の激痛が、いま心身に全方位から徐々に接近してくるのを待ち構えている。